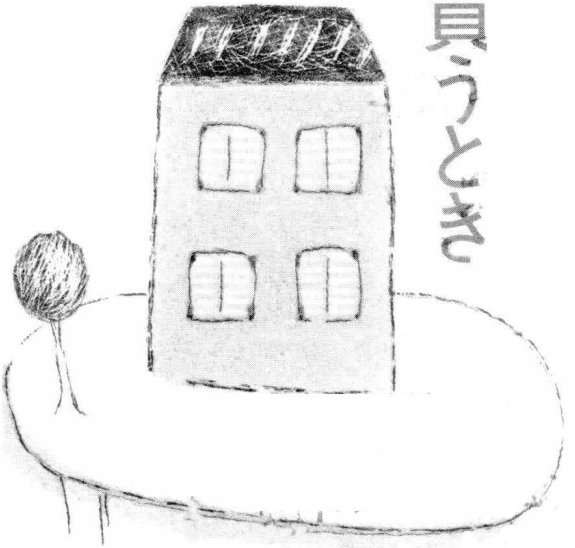
# 女が家を買うとき

松原惇子

# 女が家を買うとき

松原惇子



文藝春秋

**著者略歴**

一九四七年埼玉生まれ。一九六八年昭和女子大学卒業。一九八〇年米クィーンズカレッジ大学院カウンセリング科修士課程修了。現在、重度身体障害者療護施設誠光荘でカウンセラーを嘱託でするかたわらニューヨークを中心にした海外ルポルタージュ、エッセイを雑誌に執筆中。


女が家を買うとき

昭和六十一年十月十五日　第一刷
昭和六十二年一月十五日　第四刷
定価　一一〇〇円

著者　松原惇子

発行者　西永達夫

発行所　株式会社　文藝春秋
〒一〇二　東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話　〇三（二六五）一二一一

印刷　共同印刷
製本　中島製本

万一落丁乱丁の場合はお取替えいたします



© Junko Matsubara 1986 Printed in Japan


ISBN4-16-340970-X

目次

第一章　吉方旅行　5
第二章　十七年ぶりのお見合い　45
第三章　自由業という名の不自由な職業　83
第四章　夕映えの館　109
第五章　女の老後　141
第六章　ジプシー生活よ、さようなら　169
第七章　女が家を買うとき　201

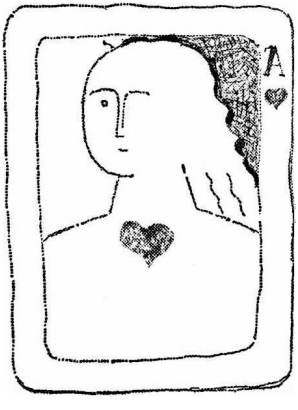
装画　宫川和子

AD　高麗隆彦

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 女が家を買うとき

# 第一章　吉方旅行



「一月二十五日、午前八時四十二分から十時四十一分の間に出発せよ。方角は真北(まきた)、吉方……」
方位学の先生から渡された紙をみながら、私はベッドの中で悶々としていた。
一月二十五日というと来週である。
「来週か……」
ベッドからおもむろに起きあがると、台所に貼ってあるカレンダーに目をやった。
特別に仕事の予定は入っていない。日付の箱の中は空白である。時間はたっぷりある。
「どうしよう」
先日会った方位学の先生によると、吉方旅行をすると、運気が好転しだすというのだ。
そんなことって本当にあるのだろうか。
あるわけない。いやあるかもしれない……。
私はすっきりしない気分のまま、再びベッドの上に体をなげだした。
もう十時をとっくにまわっているのに起きられないでいる。
心が病んでいる証拠である。困ったことにこんな気の晴れないぐずぐずした曇りの日が暮から

ずっと続いている。

世の中おかしなもので、気が沈んでいる時に限って、ふだんの生活では知りあうチャンスもない占いの先生などと偶然に出会ってしまうのだ。

どちらが呼ぶのか知らないが、出版社の件で話を聞きたいという人がいる、という女友達の紹介で会った男性が、たまたま方位学を長年研究している人だったのである。

私は、もともと占いが嫌いな方ではなかった。いや、むしろ好きな方かもしれない。が、いわれたことをすべて鵜呑みにするほど信じていないかわりに、悪いことを言われれば、なんとなく気にする程度のものである。

私は今までに何人もの易者に自分の将来についてみてもらったが、その的中率は、おおよそ当らずとも遠からず、というところだ。

占い好きの友人に連れられていった乃木坂の中国占星術の先生は、私は三十五歳で結婚し、不動産を次々と増やす、と言って当時三十三歳だった私を狂喜させたが、これは見事にはずれた。私は三十七歳だというのに未だにひとり、それに不動産どころかアパート住いである。

かの有名な新宿の母、栗原すみ子女史は、機関銃のような早口で私の手相を、御自分の指でなぞりながら言った。

「あなたは家庭におさまるタイプではありません。結婚するより仕事をしていた方が幸せになれます。好きな男性はもうすぐ現われるでしょう。結婚できなくてもその男性が力になってくれ、あなたは仕事、愛情共に充実し幸福な中年期を過ごすことができます」

栗原女史によると私は愛人になった方がいいということらしいが、未だに、それらしき男性の影もない。二十八歳の時、友人の友人であった五味康祐氏に観てもらったことがある。テレビの人相相談で評判の高かった五味氏は私の顔を一目みるなりこう言った。

「あんたは特別美人ってわけじゃないけど、幸せになれる人相してるよ。あんたと同じ運勢をもっている女性が今までに一人いた。その女性は、ある日、キャデラックに乗ってお礼に来たよ。あんたは、好きなように一生を送れる珍しい運勢をもっている人なんだよ。ふつうの人は、妥協しながら生きていかなくてはならないが、あんたは妥協したらダメになってしまう。妥協しないと風当りは強いけど、大丈夫。なんの心配もいらないから好きなことをしなさい。今は苦しいけど、そのうちいい事が必ずある。結婚はこだわらん方がいいね。どっちにしろ、あんたの望み通りの大木のように大きな男が三十代後半ででてくるよ。三十五歳まではパッとしない人生だが、それからは末広がり。あんたは女として最高に幸福な人生を送ることができる。僕が保証する……」

五味氏にいわれた時、私はまさに天にも昇る心地だった。部屋をでるなり私は手あたり次第に友達に電話をしまくったものだ。が、今の私の身辺は静かなものである。大きな男どころか、小さな男が近づいてくる気配さえない。どの易者も口をそろえるように三十代半ばから私の運気は良くなるといった。

今、私は三十七歳、いくらなんでも、もうそろそろ幸運のきざしが見えてもいい頃である。それなのに、その気配さえないのだ。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

この齢になって、私がこんなに憂鬱な気持ちでいることを予言した易者は結局一人もいなかったことになる。

所詮、占いなんてこの程度のものなのである。お遊び、お遊び！

それなのに、私は、こりもせず方位学の先生がすすめる吉方旅行にでてみようかと真剣に迷っているのである。

これはいったいどういうことなのだろうか。

私はこのごろ、厳密にいえば三十五の坂をすぎた頃から「こんなはずじゃなかった」という軽い失望感が心の中で発生しているのを感じていた。

「こんなはずじゃなかった！」

その思いは、まるでガン細胞のように日に日にふくれあがり、私を脅かしだした。

「あなたはいくつ？」

「三十七歳」

白雪姫ではないが、私は鏡の中の自分にむかって尋ねた。

「この世で一番、幸福なのはだあれ」

「それはお前だよ」

そう、私はずっと自分は幸福な女だと思ってきた。

両親は健康、そして私も健康。男友達も女友達も沢山いる。好きな時間に起床し、好きなだけ仕事をしている。フリーなので誰に束縛されることもない。やりたくない仕事はやらなければい

い。海外ルポという名をかりて年に二回はアメリカに飛んでいる。アメリカには学生時代の友人が沢山いる。

私は、ベランダから緑の森がみえる家賃八万二千円の代々木のアパートに住んでいる。二LDKのアパートはひとり住いには贅沢すぎるほど広い。暇な時間はポピュラーピアノとジャズダンスのレッスンに出かける。

文字通り、自由気儘なひとり暮し、私は誰に束縛されることなく自由に生きている。

これで幸福じゃない、と誰が言えよう。

それが、最近の鏡の中の私は、「幸福なのはお前だよ」と言ってくれなくなった。

「こんな生活、幸福なんかじゃないわ」

私は人が羨むほど自由に生きているというのに、幸福だと感じられなくなったのである。三十七歳の私はもっと精神的に満たされていなくてはならなかった。それなのに、なぜ？　どうしてこんなことになったの？

私にはわかっている。

私は、自分がこよなく愛する〝自由〟という生活に苦しめられはじめているのである。

私はありあまるほどの自由の中に身をおき、その自由をどう扱っていいか、もてあましているのだ。自分でつかんだ自由の中に埋没しかかっている。

好きな仕事をやり、毎日を何となく楽しく過ごしている私は、ただ〝自由〟、縛られてない、というだけである。

なんと空しいことだろう。

女、三十七歳、女盛り。

肉体的にも精神的にも充実しなくてはいけない年齢である。女の人生の中で、一番おいしい時期である。

私は何をしてきたのだろうか。

子育てもしていなければ、それに匹敵するほどの仕事をしてきたわけでもない。世の中に対し何の責任をとることもなく、ただ、好きに生きてきただけである。

私が二十代、三十代をかけて探し求め、手にした自由は、こんなものだったのだろうか。

私の求めてきた自由はもっと光り輝いているものでなければならない。三十代前半までは、それでも自由に生活していることが幸福だったが、四十を目前にして、自由は、私の肩にズンとのしかかり、私を苦しませはじめた。

「私はこの自由から脱けだしたい。もう自由はたくさんよ！」

自由、それは今の私にとって空虚以外のなにものでもないのである。

私は自分の自由に足枷をはめる時期がきたのかもしれない。私は自分を自分で規制して生きていかなかったら、自分でつくった自由に殺されかねない。

このままでは糸のきれた風船のように、私は大空どころか、ブラックホールの中に吸いこまれ消滅しかねない。

「結婚」

突然この二文字が、どこからともなく現われ、私の頭の中を占領しだした。

結婚、そう結婚していないから、こんな気持ちになるのだろうか。ここで結婚すべきなのだろうか。私の自由すぎる生活に歯止めをかけるには、結婚しかないのだろうか。

結婚……。

しかし、私はなぜ今まで結婚することを考えなかったのだろうか。私は独身主義者ではないし、時間は十分あったはずなのに。

正直言って、私は今まで一度も心の底から「結婚したい」と思ったことはなかった。

口では「いい男性がいたら結婚したいわ」と言っていたが、それはあくまでも「どうして結婚しないの」という追求を避けるための自衛手段だった。

三十五歳までは、自分のことだけで精一ぱいだった。仕事のことで夢中だった。

フリーという不安定な立場にいながらも、やりたい仕事をやっているので幸福だった。

結婚して自分の拠点をつくることより、自分をジプシーのような、トランク一個で別の世界にすぐとんでいくことができる立場においている方が、自分には似合っていると思っていた。

それに好きな男性はいたが一緒に住んでみたい男性に一度もお目にかかったことがなかった。

友達は、私のことを理想が高い、というが、感性のあわない男性と暮すぐらいなら、ひとりでいた方が精神衛生上よいし、やりたいことをやっていれば、いつか、その線上に、いい人が現われる、と信じていた。

それは一年後か十年後かわからない。もしかしたら永遠に現われないかもしれない。いや、私はそんなに運が悪くないはずだ。きっといつか現われる……。

だから、毎日を自分の思うがままに生きていれば、結婚、結婚、と目くじらをたてなくても、私にとっての白馬の王子は必ず現われる、と心のどこかで確信していた。

それが、三十五歳を過ぎてから、すっかり自信がなくなってきたのである。何かがみえてきたのだ。

私の希望的観測とは別に、私の本当の人生は、まったく予期せぬ泥沼の方にむかっているのではないか。うすうすは感じていたが見たくないので見えないふりをしていただけである。

コレット・ダーウィンの書いた「シンデレラ・コンプレックス」を読んだ時、私は、自分のごまかしを鏡にうつされたような気がして目の前が真っ暗になった。

女性には、いつか自分を救ってくれる白馬に乗った王子が現われると信じている人が多い、とその本に書いてあったからだ。私こそ、その代表みたいなものである。私は単なる重症のシンデレラ・コンプレックスだっただけなのである。

あの本を読んだ時、私はショックで立ちあがれなかった。

私の白馬の王子願望の気持ちは、私のもって生れた楽天的性格のせいだと信じていたのに、あの本は、それは女性独特の他者依存の心理だと断言したのだ。

私は、人には言わなかったが、自分は他の女性とは違う、と信じている部分があった。他の女性よりきれいとか有能とかいうことではなく、変っている、ディファレントであると……。

これは私にとって優越感的快感であり、私の存在を証明する唯一のあかしであった。私は十把ひとからげの女じゃないのよ。私はふつうの女性とは違う。その思い込みは私が今日まで独身で生きてこられた精神を支える原点だった。

それなのに、あの本は私はみんなと同じと決めつけたのである。これじゃ私も平凡な牝馬ということではないか。

二十代のシンデレラ・コンプレックスなら可愛いが、私は四十に手が届こうとする、押しもおされぬおばさんである。ああ、イヤだ！

はたとまわりをみわたすと、みんな、それらしきところにおさまっている。

私の女友達も、三十五歳になってあわてて結婚した。相手は五歳年下の同じ出版社に働く男性である。

「あんな、つまらない男性とよく結婚する気になったわね」と軽い軽蔑感をもった私だが、考えようによっては、彼女もシンデレラ・コンプレックスを克服してだした結論であったら、大したものである。

結婚がすべてだと思わないし、結婚しない女は欠陥だとも思わない。結婚という形がすべての女性に合う、ということは私には信じられない。が、もし、家庭をもつ気があるなら、今の時期三十代をのがしたら一生ない、ということだけは明らかである。

五十歳になって伴侶にめぐりあった女性もいないことはないが、これは例外中の例外だろう。

おそらく、今が私にとって結婚できるラストチャンスである。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com